

氏名(国籍)	趙 愛 淑 (韓 国)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博 甲 第 2727 号
学位授与年月日	平成13年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	現代日本語における限定のとりたて詞の研究 —「だけ」「ばかり」「しか」を中心に—
主査	筑波大学教授 博士(文学) 湯澤 質 幸
副査	筑波大学教授 高田 誠
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 坪井 美 樹
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 鷺尾 龍 一
副査	筑波大学助教授 Ph. D. 竹 沢 幸 一

論文の内容の要旨

本論文は、現代日本語における限定のとりたて詞、とりわけ、「だけ」「ばかり」「しか」を中心に、その言語学的な分析を行ったものである。とくに、これらの意味的特性について、三者を比較対比しながら、それぞれの類似点、相違点を体系的に分析記述したものである。全体は6章からなっている。序章において先行研究を吟味しながら問題のありかと研究の目的を示し、2章では、これらの形式に共通する文法的特性、意味的特性を論じている。3、4、5章において、それぞれ「だけ」「ばかり」「しか」について詳細な分析を行い、6章において、これら三者を比較対比しながら、その文法的・意味的特性を総合的・体系的に明らかにし、それを本論文の結論として提示している。

序章においては、「限定」という文法概念をめぐる、さまざまな先行研究を比較検討しながら本論文における著者の立場を明らかにしている。すなわち、ある「X」について「Pである」ということがあるとき、「XだけPである」「XばかりPである」「XしかPでない」は、それぞれ「XがPである」と同時に「X以外はPでない」ということをいっており、Pの成立にかかわるのはX以外は排除されXに「限定」される。「XもPである」では「X以外がPである」ことが前提となり、「XはPである」では「X以外」についてはPであってもPでなくてもよく、したがって、「も」「は」はXを限定していない。このように見たとき、「だけ」「ばかり」「しか」のもつ機能を「限定」とすることができるというのが著者の主張である。

第2章では、「とりたて」をどのようにとらえるかについて論じている。まず、統語論的観点からこれらの形式のもつ特性として「統語的位置の非固定性」と「統語的機能の無関与性」とをあげている。前者は、「だけ」「ばかり」「しか」が文中のさまざまな構成要素に後接しその分布が固定していないという特性である。後者は、これらの形式を付加して「Xだけ/ばかり/しかPである」とした場合のXのもつ統語的役割と、これらが後接しないXのそれとが同じであるという特性である。つぎに、意味的な特性としての「とりたて」とはなにかについて、先行の議論をふまえながら、著者の立場を主張している。すなわち、「Xだけ/ばかり/しかPである」においては、「X」(著者はこれを「自者」と呼ぶ)について「Pである」と言明すると同時に、「X以外」(これを「他者」と呼ぶ)について「Pでない」ということも言っている。つまり、他者との対比の中で自者について述べるという点をとらえて、これを「とりたて」機能とするという主張を試みている。そして、「とりたて」によって、自者

を肯定すると同時に他者が否定されるという二重の意味が構成されると論じている。

第3章では、「だけ」について詳細な分析を行い、自者肯定、他者否定という二重の意味構成において、自者肯定が明示的に示され、他者否定が暗示の意味として示されるとし、「Pである」の部分述語の形態には制限がなく、肯定的事態、否定的事態のどちらとも共起できるとしている。

第4章では、「ばかり」について「だけ」と対比しながらその特性を論じている。すなわち、自者肯定、他者否定という二重の意味構成において、自者肯定が明示の意味として示され、他者否定が暗示されることでは「だけ」と同様であるが、自者・他者のとらえ方において異なる点があるとしている。たとえば、「男の子だけ来た」では、自者である「男の子」について、他者「男の子以外」と対比して、全体を1つの集合ととられ、その全体について否定するのに対して、「男の子ばかり来た」では、「来た」というPを行ったものXという集合に対して、一つ一つ「男の子」が否かの対比がなされ、「男の子」が多かったと判断したということを表示している、言い換えれば、「だけ」は1回の対比であるのに対して、「ばかり」は多回の対比をしているとする。そして、多回の対比をした結果自者肯定が多かったとする。これを著者は「自者多量表示」機能と名付け、「ばかり」のもつ特徴であるとしている。この場合、自者が他者より多いという判断が言語的に示される（意味として表示される）ので、他者の方が成立することが一部あってもかまわない、「女の子」が混じっていてもかまわないというわけである。つまり「だけ」では、「来た」ものすべてが「男の子」でなくてはならないということになる。さらに、「自者多量」という意味との関わりで、Pの示す事態は「肯定的事態」でなければならないということも「だけ」との相違として示されている。「男の子だけ来なかった」はいえるが、「男の子ばかり来なかった」は非文となるというわけである。

第5章では、「しか」について、「だけ」「ばかり」と対比しながら論じている。自者肯定、他者否定という2重の意味構造は「だけ」「ばかり」と同じであるが、明示、暗示されるものが異なっているというのが著者の主張である。「XしかPしない」において、「Xしか」は自者「X」を明示し他者「X以外」を暗示しているところは「だけ」「ばかり」と共通するが、「Pしない」は他者について明示的に述べ自者について「Pする」は暗示的に述べている点で、他の二つと異なるとしている。つまり、「しか」は、他者否定が明示され、自者肯定が暗示されるというわけである。さらに、意味的重点の置き方として、「だけ」「ばかり」では自者の成立を述べるところに重点があるのに対して、「しか」では他者の不成立を主眼とした叙述であるところに特徴があるとしている。つづいて、成立しなかった他者に対して、「だけ」「ばかり」では成立してほしかったという意味合いはあってもなくてもよいのに対して、「しか」ではこの意味合いが必須のものであるとし、それを「他者期待表示」と名付け、「しか」のもつ特徴であると論じている。

第6章では、これまでの各章の議論をまとめながら、全体の結論を提示している。すなわち、これら三つの形式は、自者肯定、他者否定という「二重の意味構造」をもつ点で共通し、「二重の意味構造における意味的重点のありか」、「自者と他者に対するとらえ方」さらには「とりたてのあり方」という三つの側面においてそれぞれ異なった意味特徴をもつとする。すなわち、まず、「意味的重点のありか」という側面において、「だけ」「ばかり」は自者肯定を主眼とし、「しか」では他者否定に重点があるとする。ついで、「自者・他者のとらえ方」という側面において、「ばかり」は自者多量表示、「しか」は他者期待表示であるのに対し、「だけ」はいずれも中立であると述べる。そして、「とりたてのあり方」という側面において、「だけ」は肯定のとりたて、否定のとりたてとも可であるのに対し、「ばかり」は否定のとりたては不可であるが、「しか」は否定述語をとるものの自者否定述語とが結びつくわけではないため、とりたての側面からは否定的述語・肯定的述語のどちらにも当てはまらない、つまり、肯定のとりたてか否定のとりたてかを問うことはできないとする。

以上、「だけ」「ばかり」「しか」の意味機能をまとめ、さらに、これまでの各章の議論をもとに、それぞれの細部にわたる特徴を整理しながら提示し、これら3形式の意味機能の特徴を体系的、総合的に描き出し、その全体像を提示しようとしている。

審査の結果の要旨

本論文のテーマである「とりたて詞」については、近年さまざまな観点から議論が活発に行われており、すでにかかなりの成果が蓄積されている。本論文において、著者はこのような現状を踏まえつつ、地道な手法でもって自身の主張を展開している。すなわち、数多い先行研究の論点や主張を丁寧にたどりながら問題点を整理する一方、大量の用例を丹念に分析し緻密な議論を積み重ねることによって、各「とりたて詞」の意味特徴について新しい視点やとらえ方を提示している。いわば成熟期に入っているこの研究分野にあつて、これまでの議論を根底から覆すような斬新な提案を期待するのはむずかしいが、そのなかで本論文はそれなりに先行研究に対案を提示することに成功している。これは本論文の特徴をなすものであり、高く評価される。

さらに、これまでの研究は個々の「とりたて詞」を個別に議論する傾向が強かったのに対して、本論文は品詞論と「とりたて詞」論との関係を論じつつ、それぞれの「とりたて詞」のなかから「限定」という機能を取り出し、この「限定」を中心として「だけ」「ばかり」「しか」を対比的、総合的に分析して、それらの意味機能を体系的に記述しようとしている。この新しい試みもまた評価に値する。

具体例の分析や各「とりたて詞」の相互関係の解明などについてはなお今後にゆだねざるをえない所があるものの、本論文がこの分野の研究に大きく貢献していることは揺るがない。

よつて、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。